



## HOME PRESS GUIDE

番組案内

## HOME『Jステーション』 8.6平和スペシャル

## 「海の向こうから見た原爆」

**放送:2003年8月6日(水) 午後4時50分～6時56分**

(17時54分～18時17分はネット)

「広島に元気を！」というコンセプトで誕生した、報道ニュース番組『HOME Jステーション』。8月6日をはさむ、4日(月)～8日(金)の一週間は、「海の向こうから見た原爆」をテーマに、ヒロシマについて“世界的視野”で考える特集を放送します。

8月6日(水)“原爆の日”当日は、平和を考えるスペシャル構成で放送。今回のアメリカによるイラク攻撃と、58年前の日本への原爆との共通点から見えてくることは何か？被爆地ヒロシマ・ナガサキの、これまで触れられることのなかった事実とは？これから広島は平和のために、どんな役割を果たせるのかを改めて探っていきます。

特集内容(予定)

- ・『在ブラジル被爆者の苦悩と願い』～在外被爆者の現状～
- ・『何故また使った!? 劣化ウラン弾の惨状』～森滝春子の見たイラクの現状～
- ・『東京原爆投下計画』～証されるアメリカの本当の目的～
- ・『キノコ雲の下にいたアメリカ人』～自国に殺されたアメリカ兵捕虜～
- ・『プレスコードの意図』～アメリカが正義の名のもとに、隠そうとしたもの～
- ・『アメリカが撮っていたヒロシマ』～58年間眠り続けた226枚の写真～

など予定

『在ブラジル被爆者の苦悩と願い』～在外被爆者の現状～

朝鮮半島と北米、南米を中心に世界各国で暮らす在外被爆者は、日本に住む被爆者と同様の支援は受けられない。医療費や各種手当の支給を定めた被爆者援護法は、日本国内に限って適用されるためだ。在外被爆者からの相次ぐ提訴。国との溝は埋まらない。「原爆で親も財産もなくし、国の政策に沿ってブラジルに渡った。原爆の後障害にも悩まされている。日本にいる被爆者と同様に扱ってほしい。」という切実な願いがある。

『Jステ』では、支援を受けたくても受けられない在外被爆者の実情などを、在ブラジル原爆被爆者協会の森田隆会長(79)を通して描く。

(7月下旬 ブラジル取材予定)

## 『何故また使った!?劣化ウラン弾の惨状』～森滝春子の見たイラクの現状～

1991年の湾岸戦争で、米・英軍は新兵器の「劣化ウラン弾」を、イラク軍に対し初めて実戦で使った。核爆発や核融合を伴う原爆・水爆とは違う「放射能兵器」である。退役米・英軍人やその家族、戦場となったイラクの軍人、市民らの間に放射線被曝(ばく)などによる、白血病やさまざまな慢性疾患にさいなまれる「知られざるヒバクシャ」の深刻な実態が浮かび上がっていた。そんな事実がある中、アメリカは今回のイラクへの軍事攻撃にあたり、イラク国民の解放が目的であり、イラク国民に対する戦争ではないとしていたにもかかわらず、住民が劣化ウラン微粒子を体内に吸入する可能性が高い劣化ウラン弾を使用。多くの市民が犠牲となった。

『Jステ』では、広島市の市民団体「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会」(森滝春子共同代表ら)の調査団が行った6月24日から10日間の調査について、詳しく伝える。調査団は、イラク戦争で米軍が使用した劣化ウラン弾の被害状況を調べるため、首都バグダッドと南部のバスラを訪れた。破壊された戦車や攻撃を受けた政府機関の建物などで、劣化ウラン弾が貫通したとみられる跡の放射線量を測定。さらには、周辺住民の身体への影響を調べるため、試料や土壌、水などを採取。持ち帰って広島大原爆放射線医科学研究所など、日本の研究機関で分析。今後も継続して調査を行うため、現地の専門家との連携も模索した。森滝共同代表は「湾岸戦争後と同様、劣化ウラン弾による放射線被害が心配される。できる限り早く被害実態を明らかにしたい」と話す。

【劣化ウランは、放射能が純粋ウランの40%、半減期は45億年。非常に焼夷性が強く、衝撃を受けると原子炉のように燃え上がり、弾頭の大部分は細かな放射性酸化物に変化。この放射性参加物質が風に運ばれ何キロも離れた一般市民が吸い込むことになる。また、弾頭の一部は燃え残り、劣化ウランとしてその土壌を汚染し続ける。】

## 『東京原爆投下計画』～証されるアメリカの本当の目的～

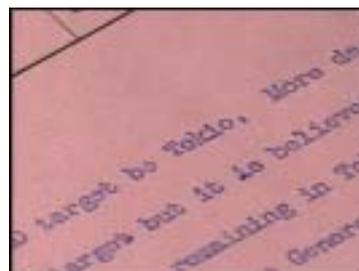
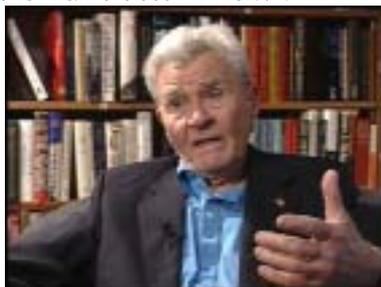
1945年の終戦直前、グアムからワシントン陸軍省に1通の極秘電文が送られた。「次の原爆投下目標として東京を強く進言する！」8月15日、もしもあの日、日本が降伏していなかったら・・・広島・長崎に続く第三の原爆が東京都心に落とされていた可能性が極めて高い。そしてこの計画の裏には、その前月、一人のB29パイロットによる皇居を狙った天皇暗殺未遂事件が隠されていた。

『Jステ』では、原爆投下作戦に参加したパイロットらの証言や、米空軍基地などに保存されていた出撃命令や電文などを元に、「東京原爆投下計画」を明らかにしていく。

### インタビュー

広島原爆投下機「エノラゲイ」機長 ポール・ティベッツ

当時の投下目標選定委員 ノーマン・ラムジー博士(1989ノーベル物理学賞受賞) ほか



エノラゲイ機長 ポール・ティベッツ ターゲット『東京』を示す極秘電文

### 『キノコ雲の下にいたアメリカ人』 ～自国に殺されたアメリカ兵捕虜～

捕虜となって閉じ込められたままで被爆したアメリカ兵がいる。原爆投下の直前、米国は英情報部から「広島に米人捕虜がいる」と通告を受けていたがこれを無視した形で、投下は強行されたとも言われている。自国の爆弾によって殺されたアメリカ兵士たち。ワシントンの国立公文書館で「極秘」扱いを解かれた兵士らの「軍歴書」の中に、「ヒロシマで戦死」との記述を見つけ、米兵捕虜被爆死の事実を確認した。とはいえ、軍歴書は、乗機を撃墜され捕虜になって広島で死んだ、としているだけで、それが原爆によるものであることにはまったく触れていない。その遺族らも、被爆死どころか広島で死んだことすらも知らされておらず、日本上空で撃墜され戦死、あるいは戦傷死したものと信じていた。政府が秘密にしていた理由については、米国民の大半が支持した原爆投下で、米兵が殺されていたとなれば、世論は批判にかわり、第2次大戦直後の冷戦激化の中での核戦略に重要な影響をもたらす、と懸念したからではないかとも考えられる。

『Jステ』では、戦闘で撃沈され捕虜となり、広島に抑留されていた米軍機のパイロット達についての証言をつづる。日本の一般市民はもちろん、味方の軍人まで犠牲にしても平気な“戦争の狂気”について考える。

### 『プレスコードの意図』 ～アメリカが正義の名のもとに、隠そうとしたもの～

敗戦で日本は約6年8か月間、連合軍に占領された。占領政策のなかで、とくに1945年(昭和20年)9月実施のプレスコード(報道遵則)は、出版・報道への検閲を強め原爆報道についてはとくにきびしい規制を加えた。長い間、原爆被害の全容や原爆の意味が全国に広まらなかったのはプレスコードも一因。また、プレスコードは原爆を描いた小説の削除、原爆の画集の発売禁止に適用され、心理的な圧力が大きかったといえる。占領期が終わると、原爆関係の記事や出版物は急に増えた。

『Jステ』では、このプレスコードの期間に行われていた驚くべき事実にスポットをあてる。アメリカ国立公文書館に残されたオリジナルフィルムをつづさに検証すると、16ミリフィルムで終戦直後の長崎を撮影したものの中から驚くべき事実が発覚した。58年前、長崎で、被爆者に何度も演技を要求する占領軍の撮影クルー。監督の演技指導のもと、何度も赤ちゃんを背負って歩かされる少女。「はい、そのチョコレート返して。そしてもう一度!」。カットの間に挟まれたカチンコが、情報操作とプロパガンダ戦略の萌芽を物語る。それは、時空を越え、湾岸戦争時のクエート少女の証言や油まみれの水鳥映像にオーバーラップしていく…。いつの時代もアメリカは、正義の名のもとに、何を隠そうとしたのかを浮き彫りにする。

### 『アメリカが撮っていたヒロシマ』 ～58年間眠り続けた226枚の写真～

広島平和文化センターがアメリカ国立公文書館から226枚の写真を手に入れた。今までの写真より、数段と精度が高い。追悼平和祈念館の体験記閲覧室でこれらの写真が公開されている。

『Jステ』では、追悼平和祈念館に遺影を登録した1枚の写真に関係する遺族に、故人への想いや平和への想いを聞く。